



Title	インドシナ モイ族の若者宿
Author(s)	大林, 太良
Citation	一橋論叢, 54(2): 212-219
Issue Date	1965-08-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/2967
Right	

インドシナ、モイ族の若者宿

大林 太良

一 はじめに

東南アジアに広く分布している社会制度のうち、村落生活において重要な機能を果たしており、かつこの地域における歴史民族学にも興味深い問題を提出しているもの一つに若者宿がある。Schurz の古典的研究⁽¹⁾以来、東南アジアの若者宿の制度の重要性はよく知られており、アッサム、ビルマに関しては、von FÜRER-HAIMENDORF がすでに資料をまとめている⁽²⁾が、インドシナ半島東南部の Moï 諸族に関しては、残念ながら、まだ同様な試みは行なわれていない。本稿の目的とするところは、とりあえず Moï 諸族の若者宿関係の資料をまとめてみることにである。

ヴィエトナム南部山地に居住する、Moï と総称される未開農耕民は数多くの部族に分れている。しかし、その分類に関しては、文化の面からは、H. Maspero の試みた父系(実は双系)群 (Sedang, Bahnar, Kôngao) と母系群 (Cham, Jarai, Rhade, Churu 等) の分類が有名であるが、これは同時に言語

的にも、ほぼ前者が Mon-Khmer 語族、後者が Indonesia 語族に対応するものであった。しかし、Moï 諸族は言語的にも文化的にもかなり雑多であって、上記の二分法は、まだいろいろな点で不満足なものである。ことに必要なのは、Mon-Khmer 語族内部の分類であって、この点興味深いのは、DAM BO の試みである。それによれば、

- 一 Biat, Sieng, Bahnar
- 二 Ma, Sré
- 三 Rôglai, Noang, Jarai, Rhade

の三群に分れ、その中でも Biat と Sieng, Rôglai と Noang, Jarai と Rhade がことに近い関係にある。もちろん、Mon-Khmer 系の Moï 諸族を更に二分するこの分類はまだ決定的なものではないが、Moï 諸族を文化の面から分類するに当っても極めて示唆的な試みである。そして、若者宿の制度は、DAM BO の第一群に主として見られるのである。

二 若者宿の実例

Moï 諸族に関する民族誌的資料はまだ極めて不十分な状態にあり、しかも筆者が利用し得たものはそのうち若干にとどまり、以下の記述も大勢を示すことで満足せねばならない。

Moï 諸族のうち、若者宿の分布地域は、南は Pleiku まで及んでいるが、北はラオスの Lanet 族まで点々と分布しているらしい。Lanet 族を除けば北から南に Kaseng, Sedang, Bahnar, Kôngao, Jarai 更に西に行って Brao の諸族であ

(6) つまり、ほぼ北緯十六度から十四度、東経一〇九度から一〇六度にかけての地域に分布が集中している。言いかえれば、この分布領域は、最南端の Jarai 族を除いて、すべて Mon-Khmer 語族、しかも DAM BO のいわゆる第一群の分布領域の北部に当てはまる。このうち、Kaeng 族と Brao 族の若者宿に関しては、HOFER が報告しているらしいが、残念ながら、この報告が利用できないので、詳細を知ることができない。CONDOMINAS 氏(7)の報告を maison commune という言葉で表現しているのが、これら資料の存しない諸族の場合、果たして若者宿か、それとも単なる集会所なのか明瞭を欠く。以下、主として比較的詳細な記述のある Sedang と Bahnar の場合を中心として資料を紹介して行こう。

Sedang 族

若者宿は DAM BO によれば、Kuat, Maspero によれば、Jon という。(8)もし子供が男児であれば、八歳位になると若者宿 (maison commune) に入る。若者宿には女は入らないが、入ることを禁止されたり罰金を課せられたりはいない。この若者宿に少年は結婚するまでとどまる。しかしここでは夜を過すだけであって、昼間は家族とともに暮す。十五歳頃歯にやすりをつける手術を受けねばならない。すでにこの手術を受けた若者が、玉石を用いて少年の上顎の門歯と犬歯をすりへらすのが、施術者にも、被術者にも何等の儀式も前もって行なわれない。少女たちは結婚まで家にとどまる。彼女たちも思春期になると

前歯にやすりをつける手術を受ける。この手術の後、少年少女は歯を黒く染める。この瞬間後始めて彼等は大人と見做され、結婚したり、あるいは単にお互いに頻繁に会う権利をもつようになる。しかし若者達は結婚の時以外には若者宿を立ち去らない。若者が家族と共に娘の両親のところに行く時には、未婚の宿仲間の一羽の鶏を提供しなければならない。「おれは、この若者宿に住むお前たちから立ち去る。おれはお前たちを離れるとき一羽の鶏をお前たちにやる。おれは、料理して食べるために一羽の鶏をお前たちにやる。おれは、お前たちがおれより先に死ぬかどうか知らない。おれは、おれがお前たちより先に死ぬかどうか知らない！」これがその時若者が仲間述べる言葉である。(9)

ところで、Sedang 族の親族組織は双系出自と夫方居住婚を特徴としている。(10)結婚は仲人によってまとめられるが、若い人たちは、極めて自由であって、前々から知り合いである。つまり、上記のように、結婚まで若者たちは若者宿に寝泊りしているが、若者たちが親類のもとに若い娘を公然と探しに行き、彼女を連れて行って若者宿で共に夜を過すことも稀ではないからだ。それでも仲人の存在は相不変必要である。ところで重要なことは、Maspero が、「Sedang 族は、Jarai 族起源の若者宿の習俗を採用した」とつけ加えていることである。この見解の当否は後で検討することにした。

Sedang 族の若者宿について注目すべきは、その建築に当って捕虜を一人、呪物のついた大黒柱を立てる穴の中に投げこ

む。それから大黒柱を彼の頭の上に落してくだいてしまふ。
CABATON によれば Moi 諸族では、そのほかに Rhate 族がかつては人身供犠を行なつた記憶をもっているが、それは大酋長らの葬儀に當つて行なわれたのであるから、Sedang 族の場合とは様子が大分異なっている。

Bahar 族

Bahar 族に關しては資料はより豊富である。COMBES, CURT, BARTHELEMY 等の報告をまとめてみると次のようである。

一村は二十軒から百軒の家から成る。各村の中心には若者宿が聳え立ち、その高くまた時には芸術的に編んで作られた屋根によつて容易に見分けがつく。大きな村になると若者宿を六つ乃至七つも有っている。この若者宿の数は、一般的に言つて、かつては分離していたが今は一つにまとめられた村の数を示している。若者宿を中心として、住家はそのまわりに環状に配置されている。

若者宿は普通の住家とほほ同様な枕上家屋であるが、それより規模が大きく屋根が高い。戸口の前には木製の非常に大きな露台がある。内部は二列になつており、十個ほどの炉があり、少年たちは共同出資で (à frais communs) 火を絶やさないうようにしている。若者宿は個人の家屋と同様にその呪石 (cailloux fetiches) をもつてゐる。それらの石はある出撃 (expedition) の帰途集められねばならぬ。P. King 村の若者宿では、呪物が、戦争で奪つて来た戦利品と同様に吊されていた。

若者宿の第一の機能は未婚の青年がそこに寝泊りすることである。十三歳から十四歳になると、少年たちは結婚するまで若者宿以外には住まなくなる。de BARTHELEMY によれば、まだ狩猟や武器を操ることのできない少年がそこに收容されており、彼等は村の負担で食事が与えられる。少年たちが何等かの勇氣ある行為によつて一人前の男であることを証明し、あるいは狩人や農耕民としての彼等の能力を立証すると、彼等は妻をめとることが許され、一軒の「多家族」家屋に属するようになる。これが彼等が若者宿を立ち去るときだ。Bahar 族のもとでは、女性が若者宿に立入ることは特に禁止されているわけではなく、一般的な祭日において、共同娯楽や公共祭祀に参加するように、女性が招待されるが、このような場合を除いては、必要がなければ女性は決して若者宿に立入らない。

Bahar 族も少年少女が思春期になると上顎の歯を小穴の多い玉石で歯茎までやすりをかける。《これは私の父や母がそうしたからだ。》この手術と若者宿に入る年齢との前後関係は明らかでない。

若者宿は単に若者が寝泊りするところではない。それは同時に部落の集会所でもある。部落の結合の象徴としてのそこでは、会議が開かれ、祭りが催され、宴会が開かれ、供犠が行なわれるばかりでなく、村の男たちが毎日の仕事のあとで駄弁ったりするところでもある。またそこでは作業も行なわれ、交易が行なわれ、また外出者が宿泊する。これらは平和な時における機能であるが、敵からの夜間の奇襲を受けたときは、《真の

城砦」となる。⁽²⁵⁾

Bahnar 族の政治組織と戦争

ここで我々は Bahnar 族の政治組織を一瞥する必要がある。他の Moi 諸族と同様、ここでも政治の単位は村落である。そして各村落においては若干の実力者がいる。Orah の報ずるところによると、村における実力者としては、村の建設者あるいはその子孫、それから最も賢明に事柄を処理する住民たちと、最も雄弁な住民たちである。その次にくるのが老人たちと富者たちである。富者であると定評のある人たちは、多数の奴隸、象、酒甕、鐘をもっている人たちだ。これらの人たちの次に位するのが戦争において最も勇敢な人たち、弓や槍を最も上手に操る人たちあるいは一番力持ちの人たちである。

de Barthelmy は戦争酋長の存在を指摘している。住民たちは独立である。戦争酋長の権威は戦争や祭儀のような一般的関心事に限られている。老人たちから成る評議会が平和時においては裁判を行なう。もし村が脅かされると、指揮権は戦争酋長にもどるが、戦争酋長は世襲的にえらばれた一族のものがいつもなる。租税として各家 (chaque maison) は、食料の不足を補い、公共祭儀の費用をまかなうために收穫物のうち一定量を納める。⁽²⁶⁾

このような村落の秩序を維持する上に重要な機能を果たしているのは、世論であり、また長老会議である。Comas は次のように報じている。「各村落は独立しており、独自の小共和国を

つくっており、その最も賢明な老人たちが自然な評議員である。しかし、彼等の意見は、一般的な承認が与えられる限りにおいて権威をもつにすぎない。会議は、みなが喋り、煙管をふかすという単純な方法で行なわれる。各人は誰に発言を求めるでもなく、思っていることを自由に話す権利をもっている。けれども若者が話すのは稀であって、若者はだまって注意深く議論を聞いているのである。若者が激烈な、劇しい言葉を述べ、熱心に意見を述べるのは、議題が戦闘に関するときに殆んど限られている。⁽²⁷⁾」かつフランスの宣教師 Dourssourre が Ko-Xam

村を訪ねたとき、村の男たちすべてが若者宿にあつまって入村の是非を討議決定するのを村の門の外で待っていないければならなかった。このときは、村における最大の実力者 Hinn の意見が他の意見を圧倒して宣教師に村の若者宿で夜をすごすことが許されたのである。この Hinn が実力者であったのは、彼が勇敢な戦士であり、また困難な事態を処理する有能さのためであった。⁽²⁸⁾

このように若者宿は村の会議所であるが、また上記のように戦時に当っては砦ともなる。そればかりでなくそれは出撃の発進地でもある。Comas は、次のように報じている。「ある村が他の村を攻撃に出かけようと思うとき、戦闘がうまく行くかどうか占った後でなければ決して出撃しない。成否をたしかめる手段には不足はない。若者宿から出発する前に、人びとは前兆として素晴らしい効めをもつ一種の根を調べる。出撃する指導者たちのうちの一人がその根を三片に切り、それを彼の刀の

刃の上におき、それから一片また一片と彼の盾の上に落しつゝ祈禱をする。」このときの根柢の落ち方成否を占うのである。また村を出ると鳥占いを行なう。このように若者宿から出撃し、その帰りに前記のように呪石や戦利品を若者宿にもち帰り、そこに保存する。また Doursboure によれば、ある村が他の村を攻撃すると、敵が引き揚げる後を追って仕返しに来ることもあるので、彼が Comars と共に Mo-Kong 村に着いたとき、「若者宿に全員があつまり、戦争の神に犠牲をささげ、米酒の香がすでに彼等の理性をかなり乱し始めていた」ので、敵に見舞われたと誤解した村人たちは、弓や刀を槍をあわてて手にする狼狽ぶりを見せたのであった。この記述からみて、凱旋の祝宴もまた若者宿で開かれるのである。

そればかりでなく、戦いの後、平和を締結するのも舞台は若者宿である。「人びとは平和条約の締結の日を決める。条約は厳粛な誓約によって固められなければならない。二つの村（の人たち）は交渉の口火を切った村の若者宿にあつまり、夫々、全体を代表する長老を一人選ぶ。一方の側は男、他の側は女である。……それが何日もたたないうちに、別の村の若者宿で同じ儀式をやり直して条約を批准する。」

Jarai 族の若者宿

Jarai 族は、若者宿の制度をもち、Moi 諸族のうち最南端に位し、かつ、これだけが Indonesia 語族に属し、母系制をもち、巨大な長大家屋に住む点において、他と著しく異なっている。

では、彼等の若者宿は、他と大いに異なっているであろうか？

残念ながら、Jarai 族の若者宿についての資料は極めて乏しい。Maspero は上記の如く、Sedang 族の若者宿を Jarai 族の影響に帰し乍ら、Jarai 族のそれについては何等詳述していない。しかし Cuper によれば Ban Jala 村では十軒ほどのみじめな住家が一軒の若者宿のまわりに環状に建てられており、これら住家は多家族家屋である。彼の報する P. Gong Kouet 村も Jarai 族らしいが、一〇〇軒以上の住家から成る大村で、そのうちのいくつかは長さ五〇乃至七〇メートルという大きさであった。Cuper は若者宿に泊ったが、*etichis* のついた珠数がそこに掛けられており、触れるのが禁ぜられていた。Banhar 族とは異なり、Jarai 族、Rongao 族および若干の他の部族では、若者宿に女の立入りは禁止されている。Jarai 族には《火の王》と《水の王》という神話的背景をもった司祭王がいたが、王が死んだときに後継者はその母系の一族中から選ばれる。その選び方には三種あるといわれ、その一つは、その家族の若者たちはすべて若者宿で眠るが、真夜中に一人の老人がそとやって来て、「誰が大司祭になるだろう」と聞くと、精霊に示唆された一人が、「おれた」と言って選ばれるという。このような乏しい資料から、はっきりした結論を引き出すことはできないが、Jarai 族では若者宿の制度があまり栄えているとは思えない。そして東南アジアでは若者宿の制度が長大家屋や母系制と結びついていることが稀なところから見ても、筆者には Mas-

pero の言うような Sedang 族が Jarai 族から若者宿の制度を受容したということは、はっきりした証拠のない限り信じ難い。むしろ Jarai 族のそれは、Sedang, Bahnar などの Mon-Khmer 的文化層から起源したと見るのがより適切ではなからうか？

三 結論

Moi 諸族の若者宿の制度は、Mon-Khmer 系 Moi の一部 (Dak Bo の第一群の北部) を中心としている。それは、村落が独立の政治単位であり、酋長の権力も Jarai 族を除いてはまだ未発達な社会を基盤としている点において、東南アジア大陸の他の例と同じである。⁽⁸⁶⁾

若者宿の存在する村では、Bahnar, Jarai および Biao 族のように、若者宿を中心に住家が環状にとりまわっているのが普通である。但し、Kaseng 族では二列に住家が並ぶ街村状をなしているのが、これは周辺部の例外と見られる。これに反して若者宿のない Moi 諸族、つまり Penong 族、Rhade 族、南部 Jarai 族の村は、環状をなしておらず、多くは不規則である。⁽⁸⁷⁾

若者宿の機能としては、集会所としてのそれもあるが、最大のもは未婚男子の宿泊所である。宿入りに関して何等特別の儀式も報告されず、また集団的な本格的インシエーションも伴っていないのも東南アジアの若者宿の一般的傾向と一致する。⁽⁸⁸⁾ Bahnar 族の場合に認められる若者宿の戦争とのさまざまな結びつきはことに注目し値する。なるほど Moi 諸族の若者宿

に泊っている若者が主な戦士であるという報告もないし、また若者宿で軍事訓練が施されるという報告もない。しかし若者宿の制度が元来は戦士組織だったのではないかと推測される二三の手がかりがある。第一に Bahnar 族における宿と戦争との内容的結びつきである。第二は分布上の一致だ。Moi 諸族のうちことに好戦的な Sedang, Jarai, Rongao の諸族とも若者宿をもつ部族であり(但し Combars によれば Bahnar 族はそれほど好戦的でない)、より平和的な Rhade 族や Mnong 族がいずれも若者宿をもたないという分布上の大勢は、若者宿の制度が元来戦争と機能的に密接に結びついていたことを考えさせる。第三は、インドシナの若者宿と系統的に関係があると思われる他地域の例との比較である。Moi 諸族における若者宿と好戦性の分布上の一致は、アッサムにおける若者宿と首狩との密接な統計的相関関係⁽⁸⁹⁾に対応するものである。このような連続と機能の変異を一層立入って分析することは、別の機会に果たしたいと思う。

- (1) Schurz, 1902, 259—288
- (2) von FÜRER-HAIMENDORF, 1930
- (3) MASPERO, 1929: 246, 253 cf. CONDOMINAS, 1953: 662—3
- (4) DAM BO, 1950: 970, cf. planche p. 971
- (5) たゞきは Haudricourt (1953: 529—530) が、一まとめにして取扱いがつかぬ。
- (6) CONDOMINAS, 1953: 662, DAM BO, 1950: 1093, BAU-

- DESSON, 1919 : 54—55
- (7) HOFFET, 1933 (CONDOMINAS, 1953 : 662 所引)
- (8) DAM BO, 1950 : 1093, MASPERO, 1929 : 246
- (6) MASPERO, 1929 : 247
- (10) 大林 一九五五、一〇九
- (11) MASPERO, 1929 : 246
- (12) LAVALLÉE, 1901 : 308, CABATON, 1914 : 231
- (13) COMBES, 1875 : 297
- (14) CUPERT, 1900 : 341. 但し COMBES (1875 : 297) は其
 々の住家の配置は不規則なと述ぐところを、著者宿が住
 家を中心とする正確なところ。
- (15) COMBES, 1875 : 298
- (19) CUPERT, 1900 : 350, cf. CABATON, 1914 : 231—232
- (17) CUPERT, 1900 : 321, cf. SCHURTZ, 1902 : 277 (BONIN
 をいへ)
- (18) COMBES, 1875 : 298, cf. CUPERT, 1900 : 321
- (6) de BARTHÉLEMY, 1904 : 142
- (20) COMBER, 1875 : 298—299
- (12) CUPERT, 1900 : 338
- (22) COMBES, 1875 : 279, 298—299, CUPERT, 1900 : 321.
 341, de BARTHÉLEMY, 1904 : 142
- (23) CUPERT, 1900 : 332
- (24) de BARTHÉLEMY, 1904 : 142 但し、その種類をその
 正確さを記述したところ。
- (25) CUPERT, 1900 : 333—334
- (26) COMBES, 1875 : 300, cf. CABATON 1914 : 225—226
- (27) DOURISBOURE, 1875 : 50
- (28) COMBES, 1875 : 305—306
- (29) DOURISBOURE, 1875 : 77—78, cf. CABATON, 1914 :
 226
- (30) COMBES, 1875 : 309
- (16) MASPERO, 1929 : 253—255
- (23) CUPERT, 1900 : 253—255
- (33) CUPERT, 1900 : 374
- (45) COMBES, 1875 : 298
- (42) LAVALLÉE, 1901 : 304
- (49) von FÜRER-HAIMENDORF, 1930 : 339, 346
- (43) CUPERT, 1900 : 341, CONDOMINAS, 1953 : 662, cf.
 Maître, 1909 : 81
- (48) cf. von FÜRER-HAIMENDORF, 1930 : 347
- (50) COMBES, 1875 : 305, Maître, 1909 : 55, CABATON,
 1914 : 225
- (54) von FÜRER-HAIMENDORF, 1934 : 435—436
- 石田大樹
 BAUDESSON, Henry 1919. Indo-China and its Primi-
 tive Peoples. London.
- BARTHÉLEMY, P. 1904. Au pays Moi. Paris.
- CABATON, Antoine 1914. Indo-China (Savage Races).

- in : *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, ed. by J. HASTINGS VII : 225—232. Edinburgh
- COMBES, J.-P. 1875. Lettre de M. Combes sur les moeurs et coutumes des Ba-Hnars. in : *DOURISBOURE* 1875 : 286—314.
- CONDOMINAS, Georges 1953. L'Indochine. in : *Ethnologie de l'Union Française* I, éd. par A. LEROI-GOURHAN, J. POIRIER : 514—516, 538—678 1007—1038. Paris.
- CUPEL, Cap. 1900. Voyage au Laos et chez les sauvages du sud-est de l'Indochine (*Mission Pavie, géographie et voyages*, Vol. III). Paris.
- DAM BO 1950. Les populations montagnards du Sud-Indochinois (Pennisens). in : *France-Asie nos. 49—50* : 927—1208.
- DOURISBOURE, P. 1875. *Les sauvages Ba-Hnars*. Paris.
- von FÜRERER-HAIMEDORF, Christoph 1930. Das Jungesellenhaus im westlichen Hinterindien. in : *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik* I : 333—347.
- 1934. *Völker- und Kulturgruppen im westlichen Hinterindien, dargestellt mit Hilfe des statistischen Verfahrens*. in : *Anthropos* XXIX : 421—440.
- HAUDRICOURT, André 1953. L'Indochine. L'écriture et les langues. in : *Ethnologie de l'Union Française* II : 524—537. Paris.
- HOFFET, J.-H. 1933. Les Moïs de la chaîne annamitique entre Tourane et les Boloven. in : *La Géographie* XLIX : 1—43. (附圖五冊)
- LAVALLÉE, A. 1901. Notes ethnographiques sur diverses tribus du Sud-Est de l'Indochine. in : *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* I : 291—311.
- MAÏTRE, H. 1909. Les régions moïs du Sud-Indochinois. *Le plateau du Darlac*. Paris.
- MASPERO, Henri 1929. *Moeurs et coutumes des populations sauvages*. in : L'Indochine, éd. par G. MASPERO II : 233—255. Paris.
- 大林大良 一九五五『東苗ノシト大陸諸民族ノ親族組織』東京。
- SCHURTZ, Heinrich. 1902. *Altersklassen und Männerbände*. Berlin. (一橋大学非常勤講師・東大講師)